

〈シンポジウムへの報告〉

私立大学の教員養成に焦点を当てて

(1) 教師になる学生の学びと人間観の転換を作り出す

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

佐貫と申します。市ヶ谷キャンパスで、教職の講義を担当しています。

尾木先生と氏岡さんのお話を聞きながら、日本の教育現場に、これだけの問題が展開していることへの困難をあらためて感じました。教育改革とは何よりもこの困難と真正面から格闘することであるべきだと思います。ところが、実際にはそのようになっていないのです。

◇学びの質の転換点としての大学での学びを

私が、お二人の話を聞いて考えてみたいのは、大学における教員養成の仕事の核心は、困難をいっぱい抱えた場で複雑な学びと成長の体験を蓄積してきた学生のその経験を、これから「過酷」な仕事の場に参加していく学生の教師としての「教育力」へと組み替え、発展させることではないかということです。

今の学校が抱えている困難、子どもから見れば、競争での落ちこぼれや、いじめ問題や、不登校問題や、生きる意欲を子どもの時代から奪われてしまうような困難がいっぱいあります。法政の学生も、そういう教育の場に満ちている困難を経験して大学に入ってきます。しかしその経験は、本当の教育の在り方から見れば、マイナスに経験されているかもしれません。たとえば、激しい競争を経験し、受験勉強に追われ、勉強が記憶主義的になるというような受験学力観で勉強をとらえているかもしれない。いやそれが多いのではないのでしょうか。

そうしますと、その学習観を持ったままで大学時代の学習を続け、教師になっていったとすると、その教師は競争で子どもを追い立てるような教育観しか持たないままかもしれません。そこでは、子どもの学習の場の質、教員養成をする大学の学びの場の質、教師になって行う授業の質、この三つが、否定的な意味で同じ質でつながれ、悪循環している。そうだとすると、矛盾がますます拡大していかざるを得ません。大学における教員養成の責務とは、その学生の大学での学びの体験の質の転換を通してその悪循環を断ち切り、それまでの苦役としての学習体験や学習観を総括し、本当の学習を自らの大学での学びにおいて発見し、子ども時代の自分の学びへの反省的総括を踏まえて、これから教える子どもの新しい学びを作り出す方法と意欲を獲得することなのではないかと思うのです。悪循環を断ち切り、新しい教育へ転換するその転換点として機能する大学の教員養成教育の質が求められているのではないかと思うのです。

◇子どもに自己責任意識を植え付ける学校

たとえば、今、日本社会が壊れつつあると思います。若者が就職する場合、2分の1が非正規雇用です。そのために学校は、学力のない者は非正規雇用になり、ワーキングプアになっても仕方がない、それは、学校で学力をつけられなかった自己責任だという形で、自分の惨めさを自分の責任として受けとめるような観念を子どもに植え付ける場となつてし

まっているのではないのでしょうか。学校は、自己責任で正規雇用に入り、人間らしいライフサイクルを営むためのいす取りゲームの場になっているのです。それをどう組み変えるのかという課題意識を学生には持ってほしいと思うのです。

先ほど氏岡さんのお話の中で、今、子どもが家庭の中で困難を抱えているとか、格差・貧困の中で大きな問題があるとか、母子家庭の子どもたちが大きな問題を抱えているとありました。しかしそういう子どもたちと出会う教師が、実は大学までの学習体験、競争体験で、正規雇用に入れないのは学力が低いことの自己責任だという観念を持ったままだったら、そういう困難を抱えた子どもたちは、自己責任を背負えないダメな子どもに見えてしまうわけです。

それから、学校現場の中で、教師が命と正義への情熱とをすり減らしていくような困難とおかしさがいっぱいあるのに、そこに対しておかしいと言えない状況があります。これは大げさに言えば、真理というものを主張することができないということです。ところが、大学は本当に真理を探究し、それを主張する方法と生き方を学ぶ場になっているかという、必ずしもそうとは言えない。

たとえば卒業論文を書いて、そして社会の中にある矛盾をいろいろ分析して、これこそが真実であると発見する経験を積むことができるかどうか。これからの人生を切り開いていく自分が依拠していく一身上の真理を発見するという学びの経験を蓄積していくならば、大学で学ぶことは、真理を探究するための自由を主張する訓練の場になるわけです。それは学校という場を真理探究の場、子どもの成長という教育価値を実現していく場に作る教師の使命感と専門性を獲得させることになります。

でも、残念ながら、競争的就活の中で、どうやって就職するかを、大学の勉強もある意

味放り出してやらなければいけないような環境の中に学生がおかれています。その状況だと自分が依拠して生きていく一身上の真理形成としての学習・研究というイメージの形成は困難になるでしょう。

◇表現の不自由や競争的学習意欲の破綻

それから、表現というものが、本来の性格を奪われています。言いたいことを言えない。学生たちの体験を聞いてみても、大きな困難を抱えています。学生の意見を読みます。「表現の自由は憲法でも定められてはいるものの、実際のところはひとの目を気にしたりして思うがままに出せない気がします。……学校でも生徒は決まった答えを求められて、間違うと恥をかうてしまうと思い、縮こまってしまっています。また、他者の目も気にしてしまうし、実際、私が小学校の頃に発言すると、友達から『先生の評価がそんなにほいいのか』などといわれて傷ついた経験もある」。「日本の教育ははじめてから答えが決まっている問題がほとんどを占めているように実感する。一番典型的なのは、入試現代文であると個人的には思っています。読み手によって解釈はそれぞれであるのに、回答は決まっている。しかも論述式ならまだしも、何とマークシート方式であるから、そこには自分の解釈を入れる余地は残っていない。今までの学生生活を振り返ると、答えがあらかじめ決められている問題というのがほとんどであったと感じています」。

そのほかにも、小学校で、せっかく発言したのに、先生に「それは違っているじゃないか」と怒られて、発言する元気をなくしたとか。学校の空間が、自分の思いを表現することの非常に難しい空間となり、だから大学へ入ってきてても、それを克服できないままにいる。もちろんそれをどうやって克服するかを大学でも格闘しているのですが、難しいんです。

それから、大学に入るには非常に競争が厳

しいのです。そうすると、競争的学習意欲というものがどうしても身につきます。その結果、どうなるかということ、大学に入ったら勉強が終わったと思って、ほっとする。何か勉強する意欲が湧いてこないという、この競争意欲症候群が支配していて、そこに就活だから頑張らなければいけないという競争の磁場が復活すると、ようやく勉強しようか、頑張ろうかとなる。真理や、自分がどうやって生きていくかを探求する学びに取り組むことが難しい状況が広がっています。

しかし、競争で子どもを勉強させるという考えのままで先生になってもらったら困るわ

けです。そういう意味で、学生がマイナスの教育観を獲得したままで教師として現場に入っていく、競争的な学習観や人間観を学校現場に悪循環的に再生産する回路を断ち切り、そこを逆転させるその転換点として大学教育が機能できるかどうか。そこに私たちの教員養成の最も核心的な責任があるのだと考えるのです。

今までの学びを転換して、子どもの新しい学びを作ろうとする若い教師を育てる大学の仕事の成否がそのことにかかっていると思うのです。お二人の話を聞いて、そういう役割、大学の責任を強く感じました。(拍手)

(2) 教師として生き続ける卒業生から学ぶ

法政大学社会学部教授 平塚 眞樹

法政大学には、相模原市と町田市と八王子市の境界に多摩キャンパスがありますが、こちらで教職課程を担当している平塚と申します。

今日、このお話について考えていて、おもしろい発見がありました。私は多摩キャンパスで仕事を始めて 20 年ぐらいになるのですが、その間に自分のゼミを中心として、学校の教員になっている卒業生の人が、30 人あまりいるのですが、この人たちが、どういうわけかまだ一人も教師を辞めていないんです。

あまり参考にならないのですが、塾など教育産業に進んだ人は、少ないのですが、8 人ぐらいゼミの卒業生でいて、そのうち続けているのは 4 人です。つまり半分辞めているんです。また、残っている人たちは、ほぼ最近の卒業生です。

◇したたかに生き続ける卒業生教員たち

自分の周りの卒業生たちは、どうして学校の教師として生き続けられているのだろうか

と考えています。一つ考えられるのは、あれこれ厳しさがあるとは言っても、学校をはじめとした公共性を体現する職場が、市場原理をベースとする企業職場と対比して、まだかすかな教育力と言ったらいいいのでしょうか、そこで働く人たちを生き続けさせる何らかの環境や、あるいは関係を持っているのかもしれないということです。

そのことについても考えてみたいのですが、今日この発言で注目していきたいと思うのは、もう一つ別の背景についてです。一方で企業よりましかもしれませんが、他方で先ほど氏岡さんのお話にも出てきたように、学校現場には固有のしんどさもあり、そのなかで今、病気になったり、辞めたりしていく教師の方々も少なからずいらっしゃるんです。

もちろん法政大学の卒業生でもいろいろな人がいることは当たり前であって、私が知り得ているのはほんの一部だろうと思います。また、今日の日本社会の状況において、職場を辞めないことが美德であるという考えは決

して持つべきではないとも思います。私も大学教員として学生たちには、危ないと思ったときには辞めなさい、そういういざというときの判断力は大事だよといつも言っていますので、辞めるべきではないとは全く思わないのですが、それを前提にして申し上げれば、学校現場を辞めずにとどまって、死なないで、職場あるいは教育の世界を少しでもよくしていくために生きていけるような、そういう教師をどうやって育てていけるかということも、大学教師として考えていかななくてはいけないと思っています。

その点で、自分の周りで巣立っていった卒業生の生き様に少しヒントがあるのかもしれないと思っているわけです。彼・彼女らを見ていて、私がおもしろいと思うのは、自分たちの職場・学校現場について語るときに、非常に大変な状況にあっても、少しその場を論評するような感じでしゃべるということです。相対化というか、距離を持てるということかもしれません。

◇子ども・学校を見る目を養う

実は私はこの2年間、あるいきさつから法政大学の付属校にも兼務として関わっていたのですが、そこでご一緒した校長先生に、私が敬愛してやまない飯田亮三先生という方がいらっしゃいます。その方がよくおっしゃるのが、教師にとってとても大事なのは、職場や子どもや同僚やいろいろな関係の中で「よい距離」を保つことではないか、ということ。距離が大事というお話にも、私はとても大きなヒントをいただいた気がしているんです。

適切な距離とは、無責任な評論家としての距離ではなく、そこに踏みとどまって新しいものを他者とともにつくり出していくための距離なのだと思うのですが、それは、いったい何を担保として生み出されるのだろうか。それが考えたいと思っていることです。

私はそれが二つあると思っています。一つ

は、大学で学問を通じて身につけていく世界観や思考様式です。

私は社会学部にいますので、ゼミの卒業生は社会学部生ですが、彼らが卒業してから言うのは、いろいろな人と話していると、ほかの大学出身の人でも社会学部の卒業生はわかるというのです。何か違う。物事を見るときにすっぱり中に入ってしまうずに、少し距離を置いて論評するような感じでしゃべるんだよねって。それに気づいて尋ねてみると、結構社会学部卒だということが多いのだと。

私は「それこそ社会的な認識と思考の様式じゃない？」と言うのですが、法学部であっても経済学部であっても、それぞれの学問分野に、知識だけでなく、認識・思考様式があるはずで、学生時代を通じて願わくばそれらも鍛えられてほしい。

これは教員養成系大学ではなく、総合制大学で学んでいる人たちだからこそ、身につけられる学問の成果かと思います。それがさまざまな複雑な状況性の中でも、適切な距離をとらせる背景になることがあるのではないかと。これが一つ思うことです。

◇学校外の社会や人とつながる

それからもう一つこれは変な言い方かもしれないのですが、教師になった卒業生と話していて興味深いのは、学校の外に社会がある、学校の外にも人がいるということを実感として持っていることです。理屈ではなく、実感としてそのことを知っている。

当たり前のことですが、先ほど氏岡さんや尾木先生のお話にもあったように、学校の中だけで今の教育問題は決して解決できないわけです。そういう意味では自分たちの困難を、学校や教育の困難としてだけとらえず、私たちの社会の困難ととらえ、他方で学校の希望は社会の希望ととらえていくような、そういう洞察力や想像力のようなものがどうしても必要になるわけですが、それは理屈だ

けで養われるものではなくて、やはり生きてきた経験の中で認識として鍛えられているものだと思うんです。

そういう点では、法政大学の学生は在学中に、教師ではないいろいろな仕事に就いていく友人たちを得るわけです。そのキャンパスライフをとおして彼・彼女らが培っている仲間関係は、卒業してからとても大事な肥やしになっていて、そういった友達と会うときに学校的な視点がつねに自然に相対化させられる。そういう上手な社会資源のようなものを養っているんだと思うことがあります。

また教員になって続いている卒業生の中には、在学中に学校ではない社会の現場で何らかの実験の経験を積んでいた人たちも少なくありません。

最近、教員採用のときにボランティア経験などを問われるので、学生からどういふことをやったらいいでしょうかと尋ねられると、できるだけ学校ではないところに行つたほうがいいよと言うようにしています。

今は学校からもたくさんボランティアの募集がきますが、それよりも学校以外の人がつ現場を、どれだけ自分にとってリアルな世

界でとらえられるかは大事だと思うから、将来教師になりたいのだったら、学生時代にそういうところを知つたほうがいいよと。学童保育、児童館、フリースクール、養護施設といった、そういう学校外の育ちの現場で何らかの現場経験を持つた学生たちが、その後に教師になってくれているような気がします。

申し上げたかったことは要するに、本日のシンポジウムは「私立大学における教員養成」というのがサブタイトルですが、私立大学が教員養成をできるようになったのは第二次世界大戦後です。第二次世界大戦前は師範学校だけが教員を養成していた。私たち、この私立大学の、しかも教員養成系ではない総合制大学だからこそ養える学生時代の経験や学問の蓄積が、もしかしたら私の身の回りの学生たち、卒業生たちが、いろいろな困難の中でもなお学校現場に踏みとどまる多少の力になっているのかもしれない。もしそうだとしたら、この「教育力」のようなものを、これからも大事にしていかなければいけないと考えています。

以上で終わらせていただきます。(拍手)

(3) 授業で影響を与えられる教員を育てたい

法政大学生命科学部教授 左巻 健男

◇法政理系は教員志望者が増えてきた

小金井キャンパスで教職課程を担当しています左巻と言います。左巻って、珍しい名前ですよね。本当の名前なんですけれど、栃木県小山市に一族が今でも繁栄しております。

僕自身は17~18年前に、その当時は僕は東京大学教育学部附属中学校・高等学校というところで理科を教える教員だったのですが、法政大学の理科教育法を非常勤でしてくれないかということで、いつのころからか、法政

大学で理科の免許を取る学生に理科教育法という科目を教えてきました。

その当時は、理科の教員免許を取ろうという学生は、10人いるかいなかったかでした。それが現在では、学年で理科だけで50名以上。教員免許取得希望者が非常に増えてきました。もう一つ、小金井キャンパスでは、数学がメインですが、合わせると百数十名という受講生がいる。

僕は学生によく言っているのですが、現在、

中学校・高等学校でいちばん教員になりやすい科目があるんです。その科目が数学と理科なんです。最も競争率が低い。頑張れば教員になれるよという激励をしているんです。

それが、17～18年前からずっと見ていくと、昔は人数も少なかったし、教員免許は片手間に取っておこうかなという学生が多かったんです。しかし最近、人数が多くなると同時に、そのなかで教員になりたい、第1希望は教員だという割合が増えてきた。人数も多くなって割合も増えてきていますから、絶対的な人数も増えてきている。

ただし、それに対して法政大学は今まではほとんどサポートしていないんです。放っておいたというか。教職課程を置きましたよ、取りたい人はどうぞという感じだったんですが、やっと最近、この教職課程センターができて、小金井にも相談室ができて、そこで教員採用試験を受けるときにどういうことに注意すればいいですかとか、小論文を書いてみたんですけど添削してもらえますかとか、そういういろいろな相談に応じられるのが、週に1日ですが設けられるようになって、かなり雰囲気が変わりました。

ですから、教員が第1希望の学生はあきらめないで、というのは、理系の就職はわりと早めに決まってしまうのです。そうすると、教員免許を取っているのに、教員採用試験は後のほうなのでやめてしまうところを、僕としてはできれば、第1希望なんだったら、会社の就活なんかやらないで、教員採用試験のために勉強して教員になったほうがいいよ、僕は今言っている次第です。

◇教員の仕事は「過酷」でもやりがいがある

先ほどからの話で、教師の黄金時代というのが昔あったらしいという話を聞きました。僕自身は1970年代にまず公立中学校の教師になり、その後に東大の附属に移ったのですが、僕はその1970年代でも教師黄金時代は

終わっていると思いました。

校内暴力が非常に激しく行われて、その後の校内暴力というものはかなり陰湿になっていったかもしれませんが、僕らが教員になったころは、それがあからさまに行われていて、教員の仕事はたとえば、各階にあるトイレへバケツを持って吸い殻を集めに行くとか、日曜日などになるとバイクで卒業生がやってきて、校舎内を走り回るとか。あるいは、ある先生が生徒に蹴飛ばされたりして、肋骨を折って入院しているよとか。そういうのが当たり前にあった時代で、自分はそういうものを過ぎてきたので、1970年代だって教師の黄金時代ではなかった。

就職したころは、昔はよかったんだと、大学のときに先生方が話をしていましたので、きっとその前が教師の黄金時代だったのかもしれない。でも、1970年代でも、学校現場は非常に大変になっていた。

僕自身はそういう中で、理科の教師になったときに、僕の場合は本当に消去法なんですね。消去法というのは、自分はあまり勉強もできない、人とうまく関われない、コミュニケーション力が低い、それから、手先が器用だったらもっと別な道もあるのだけれども、手先が不器用。それで、学校の教師ぐらいにはなれるかもしれないな、そういう気持ちでなつた。

ただし、なつたときには、理科の授業は頑張ろうと、ものすごく決意してなりましたので、それについては非常に自分なりに学習をし、自分なりに教材をいろいろと考えて授業をした。自分が中学生だったときに、わからなくてつまらない授業を聞いていた自分がいるわけです。そうではない、教卓の向こうに昔の左巻健男がいて、自分が受けたあのつまらない授業と同じような授業をしているんじゃないよと言われたいような、そういう授業をしたいと思っておりまして。

この前、つい1週間前の日曜日に、35年前

に中学を卒業した僕の教え子の同窓会があって、そこで五十数人集まっていたのですが、卒業して何十年もたっていますから、一人ひとり短い自己紹介があったんです。

そうしたら、かなりの割合で、僕がやった理科の授業の話をするんです。35年間を通してこんな実験は何とかかんとかだったと。そうすると司会が、「今日の同窓会は左巻先生を讃える会ではありません。理科の授業の話だけするのはやめてください」。ほかの先生もいましたので。そういうことがありました。

僕は「過酷」かもしれないなとは思いますが、やはり「人を惹きつけてやまない仕事」なんじゃないのかなと。僕のような、普通の仕事に簡単に就いたら、すぐだめになっちゃうだろうなという人間でも、理科を楽しく学べるようにいろいろ考えて授業をやったら、それが生徒に対して、ある印象を残した。

ということで、今でもそういう気持ちで、僕は理科が大好きなので、何かおもしろいことはないか、日本全国あるいは外国でも、こういうところへ行って、こういう自然、こういう地形、こういう岩石とか、そういうものを見たいとか、何かそういう気持ちがいつもあります。そして、新しいこんな実験をやってみたいという気持ちを持っています。

僕は学生たちに、現場は大変なんだけれど、もしかして理科とか数学とかで、もっと自分に自信を持って、先ほど尾木さんが、現場に教育実践の自由があったら、もっと自分たちで考えて、もっとわかる授業、楽しい授業をするわけですね。僕はそれがある程度できた……、できたんだから黄金時代か（笑）。

今でもいろいろな管理でがんじがらめにされたり、いろいろな問題があるかもしれないけれど、自分の授業者としての自信を持てれば変わっていくのではないかな。そういう教師が育てられるといいなと今でも思っています。

（拍手）

閉会挨拶

法政大学キャリアデザイン学部教授 高野 良一

皆さん、今日のご来場いただきまして、ありがとうございます。法政大学にも、2012年春からやっと教職課程センターが船出しました。本当に小さな一歩を踏み出したわけですし、私たちが努力するのはもちろんですが、皆さんのお力添えも願っております。

さて、前半のお二人のプレゼンテーションを聞いて、“教育で始末をつける”という言葉は私は思い出していました。宗像誠也という教育学者が半世紀前に注目したフレーズです（『私の教育宣言』岩波新書）。官僚や政治家などが、経済や社会、家族の問題を教育にしわ寄せをして、教育に解決をゆだねようとする考え方（教育観）を指しています。尾木先生や氏岡さんの話を聞いておりますと、“教育で始末をつける”ことは、結局、“教師で始末をつける”ということに行き着くのかなと思ったわけです。いろいろな教育問題、例えば、いじめや自殺、学力やカリキュラムなどの問題解決を、一人ひとりの教員の努力や熱意に依存し、あるいは彼らを悪者にして済ませてしまうところがあるのではないかということです。

もちろんミクロな問題解決のレベルも無視してよいわけではないのですが、国のマクロな学校制度や教員養成の仕組みも改革していかなければなりません。また、後半の報告で、キャンパスそれぞれの教職課程の取り組みを私たちの同僚が紹介いたしましたが、こうしたメゾ・レベルといえる学校やキャンパスを単位とした努力も大切になります。私立大学の教員養成とは、狭い意味での教員養成だけではなくて、学校やその周辺の問題を掘り起こし、解決を目指そうとする若者を育ていくことも含まれます。マクロな社会や制度の

あり方に関する学びと、教師や教育関係者の生き方から学び職務能力を育むことを、どう学生諸君がつけられるか、これを教職課程の課題として、私立大学の独自性も発揮しながら取り組んでいかなければなりません。

この点では、法政大学はこのセンターをつくるまで、“学生で始末をつける”という姿勢が強かったのではと反省しています。私は二十数年間、法政大学に勤めてきましたが、教職をめざす学生の皆さんに対して、大学としての組織的な対応は不十分であると感じてきました。教職を目指す学生の皆さんの熱意や努力に甘えてきた部分が大きかったわけです。冒頭でも言いましたが、やっと“学生で始末をつける”状況を改善するきっかけを、3キャンパスのセンターが創り出しました。各センターはそれぞれに課題をもっておりますし、大学全体としてもまだまだ多くの改善課題をもっております。

本日を一つのきっかけとして、私たちの教職課程とセンターに関心を持っていただき、叱咤激励も含めいろいろな声をお寄せいただければ幸いです。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。（拍手）

〔法政大学教職課程センター開設記念シンポジウム ポスター〕

法政大学教職課程センター開設記念シンポジウム
現代の教師に求められるもの
— 私立大学における教員養成を考える —

開催日時：2012年7月21日（土） 13:00～16:10

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎 6階

さった
薩埵 ホール

プログラム

12:30 受付開始

13:00 開会挨拶

13:10

講演 1

「日本の教育の課題と展望 —大学に求められるもの—」

尾木 直樹 氏（法政大学教職課程センター長）

講演 2

「いま、先生は —過酷な、しかし人を惹きつけてやまない仕事—」

氏岡 真弓 氏（朝日新聞編集委員）

14:50 討論 「私立大学の教員養成」に焦点を当てて

参加費：無料

16:00 閉会挨拶

お申込み方法

※事前申込／

先着定員制

【一般・卒業生の方】

「往復はがき」の往信の文面に郵便番号・住所・氏名・電話番号・参加人数（1通で2名様まで）／
返信の宛名面に参加証の送付先（代表者の郵便番号・住所・氏名）を明記のうえ、下記【お申込み先】
シンポジウム受付係までお送りください。※返信はがきは当日の参加証となります。
お申込み締切：2012年7月5日（木）当日消印有効

【法政大学学部生・大学院生の方】

各キャンパス下記窓口でお申込みください。
市ヶ谷キャンパス 教職課程センター／多摩キャンパス 所属学部窓口／小金井キャンパス 理工学部窓口

● 最寄駅 ●

【JR】総武線：市ヶ谷駅、飯田橋駅 【地下鉄】都営新宿線：市ヶ谷駅／東京メトロ東西線：飯田橋駅／都営大江戸線：飯田橋駅／
東京メトロ有楽町線：市ヶ谷駅、飯田橋駅／東京メトロ南北線：市ヶ谷駅、飯田橋駅
※市ヶ谷駅、飯田橋駅より各徒歩10分

法政大学教職課程センター開設記念 多摩シンポジウム

本学多摩キャンパスにおいて2012年11月16日（金）17時より教職課程センター開設記念多摩シンポジウムを開催します。詳細は追って、本学ホームページに掲載予定です。

HOSEI

主催 法政大学教職課程センター

【お問合わせ】TEL 03-3264-5562 受付 月～金曜日 10:00～18:00

【お申込み先】〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1 法政大学 教職課程センター シンポジウム受付係